

〈一般研究課題〉 河川堤防改修工事等が歴史的街並景観に及ぼす影響
および 景観デザインコントロール等に関する研究
助成研究者 愛知県立芸術大学 野田 理吉



河川堤防改修工事等が歴史的街並景観に及ぼす影響
および 景観デザインコントロール等に関する研究
野田 理吉
(愛知県立芸術大学)

Influence of river dike improvement to the historical street
and Study of scenery design control

Rikichi Noda
(Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music)

Abstract:

Modern urban infrastructure projects of roads and bridges make our daily life more comfortable, however, in exchange for modernization, classic Japanese style roads and neighborhoods are lost. This especially happens in rural towns, where there are many old cultural assets and buildings that are negatively affected by modern infrastructure.

In light of this problem, we are working on how to combine past and present in more balanced and agreeable ways.

Our project this time is to study what the (potential) influence that raising a dike levee, making river and road improvements, and changing three bridges will have on the town of Nishibiwajima. (70% of Nishibiwajima was flooded by localized heavy rains September 11, 2000) We will research the 400 year local history and how best to combine classical assets with modern urban infrastructure. We will present our researched and refined ideas to the local residents of the affected areas, and make adjustments from the residents' thoughts.

We are making draft plans based on what we believe to be the best way to deal with problems like railroad track conditions, and traffic jams on the Nagoya-Sobuesen Prefectural Route that divides the town. We will also include in these plans how best to retain the original essence and heritage of Nishibiwajima that will not hinder further modernization and development.

1. はじめに（研究目的）

庄内川をはさんで名古屋市と隣接している西枇杷島町は、枇杷島橋詰め的美濃路街道と岩倉街道の分岐地点近辺にあり、江戸時代より当地域の台所としての青果問屋市場として大きく発展して来た。しかし、かつて商家が軒を列ねた街道も現在では近隣の大規模小売店に客足を奪われかつての賑わいはまったく感じられない。近年は店も徐々に空家となり更地や駐車場に変わってきた。一方、平成12年9月11日に東海地方は未曾有の集中豪雨に見舞われ大きな被害を受けた。恐れていた庄内川の堤防決壊ではなく考えもしなかった町の西側の新川堤防が決壊し、町域の約70%が床上浸水の影響を受けた。災害後、建設省は住民生活の安全を守るために新川・庄内川の河川改修工事を計画し庄内川堤防の嵩上げ案を打出してきた。そして新しい堤防の大きな法面は民地側敷地までその影響を及ぼし、旧街道橋詰・問屋町地域では町家家屋が取り壊されたり立退きや移転等が求められてきた。さらに嵩上げ工事は橋や堤防道路に接続する既存道路の取付け等にも大きな影響を及ぼし、現状道路の形状や位置の変更も検討されている。大きく当地域が変貌し、地域住民が移転離散することは地縁のつながりも途絶え、300年の歴史を伝える祭りや伝統的な行事等の維持に影響があることは必至で、町存続の最大危機となっている。過去の伝統や文化を継承してきた人々の日常生活の中から今日に繋がる様々な要因を探り出し新たな再生に結び付けようとする研究や提案は現在もっとも求められている。どのように地域が変化しようとも我々の社会生活は地域の密接な近隣関係の中で育まれ構築されている事に何ら変わりはない。この研究は美濃路の変わりゆく姿を地域とともに考え、地域とともに提案する事を研究の目的としている。従ってこの報告書が最終提案ではなく、むしろともに検討しながら創りあげる「スタート」として位置付け、今後も継続して地域コミュニティがつくる住民主体のまちづくり活動に結び付けたいと考えている。

2. 研究活動の概要

過去4年にわたり自主研究として継続して来た西枇杷島地区商店街との様々な関わりから、更に前進した歴史的街並の総合的な再生計画を地域住民とともに作りあげることを考えている。現地に足を運んでの調査がメインとなり、地域住民の意見を集めるプロセスがもっとも重要と考えている。具体的には様々な歴史的遺産等の現状確認・把握作業の為に調査を行った。そして住民との意見交換を円滑にする目的と、さらなる現状把握あるいは検討を住民とともにこない新たな提案を構想する為に1/300の現状地域模型を制作した。さらに様々な地域のコミュニティ活動・まちづくり活動などに参加し、聞き取り等による住民の日常生活実態調査をおこなった。また今回の建設省河川激甚災害対策特別緊急事業による庄内川護岸整備及び堤防の嵩上げ整備工事やそれらに伴う道路建設等の当局計画案に対する住民の複雑な思いも聞き取り、前述の地域模型を利用しながら橋梁や鉄橋の架け替え方法或いは取り付け道路の高さや位置形状の変化、堤防に接した家屋への影響等を確認検討し、試案を作成した。

今後はその模型を利用して地域住民との実務的な意見交換などをさらにおこない、確認・検討を重ねて新たな西枇杷島地区の再生像を構築することを目指したい。

3. 美濃路街道と西枇杷島町

3-1. 美濃路街道沿い集落の成立

西枇杷島町は愛知県の北西部にあり、庄内川をはさんで名古屋市に隣接している愛知県で一番小さな町である。古くから京都と東日本をむすぶ要衝の地でもあったが、国道22号線、県道名古屋岐阜線、或いはJRの東海道線・新幹線、名鉄名古屋本線・犬山線などが交差する交通の要所となっている。江戸時代に徳川家康は五街道（東海道・中山道・甲州道・日光道・奥州道）と呼ばれる道路整備を行なった。江戸と京都を結んでいたのが東海道であり中山道である。それらの並行する街道をつないでいたのが美濃路であった。美濃街道とも呼ばれるこの美濃路も幕府道中奉行の管轄下にあった主要街道の一つとして、東海道と熱田宿で分かれ、北に向かい名古屋城の西を通り庄内川を越えて濃尾平野を縦断し、垂井で中山道に合流する脇街道であった。美濃路が当時から主要な街道であった事実として、関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家康が凱旋したこと、或いは1614年10月大阪冬の陣の大軍が庄内川を船橋で渡ったなどがあげられる。その大阪冬の陣で通過した折に、時の御道奉行川野藤左衛門に架橋をいいのこしたことが徳川義直に伝わり、1622年、庄内川に枇杷島橋が架けられたとのこと。一方、中世以来の尾張の中心最大都市は庄内川の西に位置していた清洲である。徳川義直の時代に政治経済の本拠が庄内川右岸の清須から左岸の新しい名古屋の地に移し（清須越し）かえられた。枇杷島橋は名古屋城下と領内の重要都市（一宮、岐阜、津島、岩倉、犬山等）をむすぶ為の重要な橋であり、架橋でますます下小田井村（現西枇杷島町）は交通の要所となり、青果市場問屋をはじめ各種商業が発展する基礎ができた。なお、橋は川中の中島によって東西に二つに分かれていた。その中島は明治以降には西春日井郡役所や西枇杷島町役場、枇杷島市場事務所などの公共施設をはじめ民家なども軒を並べ、風光明媚な枇杷島の中心地として大いに繁栄していた。しかし、その中島は庄内川の最も狭い狭窄部にあり川幅の半分近く占めて水の流れの疎通を妨げていた。洪水から地域を守る抜本的治水対策の上ではこの中島の撤去以外に方法はなく、第二次世界大戦後の昭和25年から本格的にその撤去工事が始まり昭和33年に完全に取り壊され現在の姿になった。

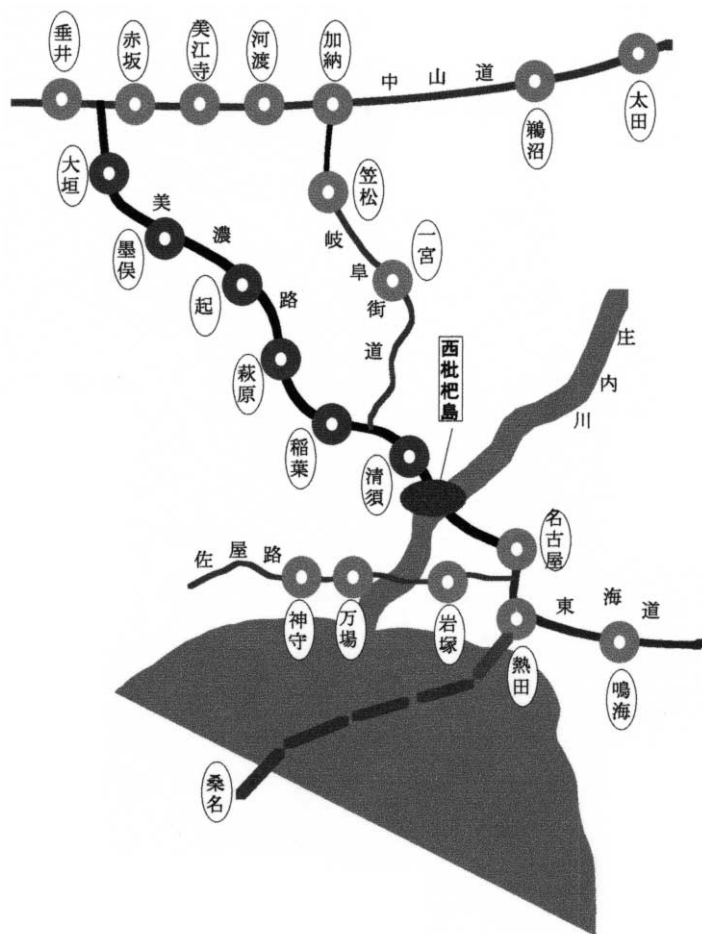


図-1 主要街道と西枇杷島の位置図

名古屋城下と領内をむすぶ為の重要な庄内川の架橋が枇杷島橋であることは先に述べた。その枇杷島橋より庄内川右岸西堤防道路を北に遡るようにのびた道路を「岩倉街道」と呼び、西にのびた庄内川の右岸自然堤防洲が「美濃街道＝美濃路」であった。枇杷島橋の架橋に伴い橋詰め近辺には橋詰町・十軒町・片町の町並ができ、美濃路を西に進むにつれ、六軒町・松原町・二ツ杵とつぎつぎと両側に町並がつけられていった。美濃路は江戸時代の参勤交代の大名通行というまでもなく、朝鮮通信史や琉球王使の通行、或いは幕府へ献上した品々の運搬等その往来はますます増えた。

名古屋城下へ供給する青果を中心とした枇杷島橋詰・問屋地域の市場は昭和30年に名古屋に移転するまでおよそ350年もの間続き、江戸の神田・大阪の天満と並び称され日本三大市場のひとつとして今日では想像もつかないほど大変繁栄し賑わっていた。戦後は重工業の発展、近年は名古屋市のベッドタウンとして住宅と工業が共生する町として栄えている。居住人口は平成12年のデータではおよそ1万6～7千人、ここ数年横ばいである。

3-2. 町並の変貌と衰退

美濃路に面した集落はその成り立ちより青果市場、問屋街としての特徴ある街並を形成してきた。昭和24年頃青物問屋が軒を並べる枇杷島橋詰付近は道路が取引き場所となってしまうほど早朝より人と車でごった返し通行に支障を来す状態であったそうである。昭和30年に青果市場が移転してからは、かつての問屋として人々を集め人波が溢れていた町に車が入り込み、我がものの顔に駆け抜ける殺伐とした町に一変した。街道からも人通りが消え、かつて人で溢れ賑わった商店街は近年の大規模小売店の出

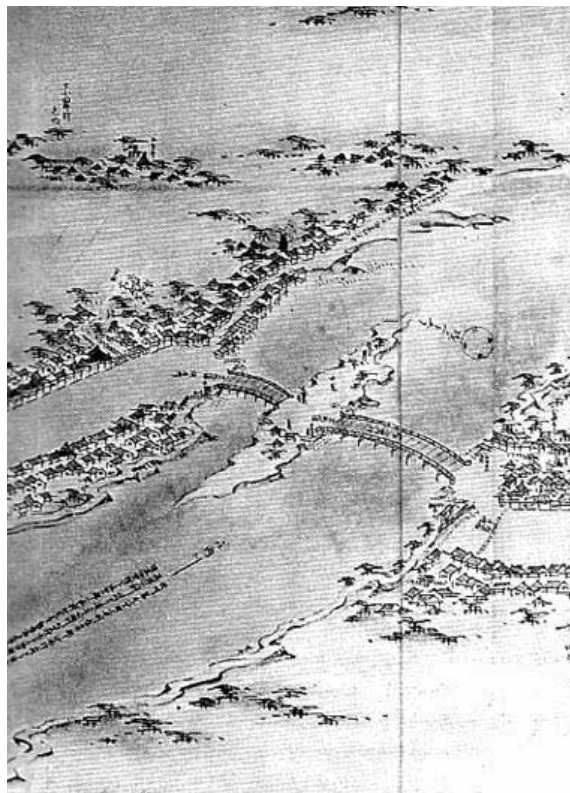


図-2 江戸期の中島(「美濃路見取絵図」より)



写真-1 青物市問屋町界隈(昭和9年)



写真-2 青物市問屋町界隈(昭和9年)

現やコンビニエンスストアの台頭などで以前の面影もなく過疎の町になってきている。この現象は西枇杷島に限ったことではない。全国地方都市のほとんどの商店街は同様の悩みを抱えている。戦後の高度経済成長は、町から人通りをなくしたと言っても良いくらいである。しかし、西枇杷島はまだ再生可能な町である。それは今なお歴史的文化遺産が財産として多く残っているからである。歴史を刻んだ町家や神社や寺などがあり、人があふれ賑わい楽しんでいる懐かしい町並みにタイムスリップする伝統の尾張にしば祭りがある。それは地縁で守り伝えられてきた西枇杷島の住民の心ともいえる山車祭りである。祭りに関しては後の5項で概要を述べることにする。



写真-3 現在の橋詰町



写真-4 現在的美濃路の街並み(杣西)

4. 西枇杷島のコミュニティー活動状況

4-1. コミュニティー活動状況

当地区の最も有名な行事に、究極のコミュニティ活動とも言える尾張にしば祭りがあげられる。この祭りは現在の町内を支えているといっても良いほど、地元の子供から大人まで総出で参加し協力している。これは地縁のつながりの好ましい例示として特筆できることである。祭りの1～2ヶ月前から子供達のお囃子の笛や太鼓の練習する音が街道に響き歴史を感じさせる微笑ましく懐かしい光景に出会うことができる。そのような影響からか、この地区は様々なコミュニティー活動が盛んで下記のようなグループがそれぞれに或いは連係して新しい西枇杷島を考えるまちづくり活動を進めている。私が西枇杷島に関わり始めたのは今から約4年前の平成11年秋からで、みのじ発展会の「シャッター絵制作」を依頼された事から始まる。

その後、それぞれのグループ活動に順次参加し外部からの立場でまちづくり活動に関わってきた。以下に各々のグループ概要と活動内容を紹介する。

●枇杷島みのじ会の概要と活動内容

昭和62年度からのホープ計画の策定作業がきっかけとなり、平成2年8月にまちづくりに関心のある住民が集まり「枇杷島みのじ会」が発足した。構成メンバーは主婦から行政職員、設計士や商店主等多彩な顔ぶれで、西枇杷島地区美濃路街道沿い住民有



写真-5 祭り練習風景(西六軒町)

志20数名が中心となったまちづくりグループである。現在のメンバーは26名。代表は後藤種苗の後藤昌治氏。美濃路街道という歴史ある町の生い立ちから、文化的で誇りある住みやすい町を目指してまちづくり活動を行う事を目的に設立された。

なお、平成7年度には会活動に対し西枇杷島町よりまちづくり文化賞大賞を受けている。

主な活動

遊々さんでい／4月の第三日曜日

先進地視察旅行／毎年

名月の集い／9月

まちづくり勉強会／定例

●にしび発展会の概要と活動内容

西枇杷島美濃路街道沿いの商店主有志が集まり往時の賑わいと活気を取り戻すことを目的として平成6年3月10日に設立された。

会長はカネヨシの近藤貞造氏。構成メンバーは27店舗。主な活動として、問屋記念館前で毎月第3日曜日の朝市の開催、6月の尾張みのじ祭り前と年末の大売出し、さらに1月には初売りと抽選会、みのじ会と共催イベントの4月遊々さんでい、9月の名月の集いがある。また、平成11年から街道沿いの店舗に、夜間や店舗休業時の賑わい演出としてシャッター絵制作を行った。(協力：県立芸大学生にしび研究会グループ有志) なお、朝市は今年の4月で100回目を迎えた。



写真-6 みのじ会先進地視察見学研究



写真-7 シャッター絵制作風景



写真-8 遊々さんでい(似顔絵コーナー)



写真-9 朝市風景(問屋記念館前広場にて)

●美濃路まちづくり推進協議会の概要と活動内容

平成10年に愛知県が建築士会に呼び掛けたのが立ち上げの原点。美濃路街道沿い1市3町を研究活動範囲（名古屋市西区、西枇杷島町、新川町、清洲町）としたまちづくり活動グループ。愛知建築士会名古屋西支部が中心となって、他に各市町の地元住民、行政、商工会、商店街等と一緒にまちづくりに取り組んでいる。主な活動内容は5つの小委員会主導で美濃路ウォッチングの開催や先進地視察、外部講師を招いての勉強会、マップの作成や美濃路説明板等の設置等を行っている。

1、美濃路イメージデザイン部会

新川一里塚のポケットパークの提案等

2、町家サーベイ部会

町家の実測調査等（清洲「山市産業」の実測等）

3、歴史部会

美濃路説明板作成等

4、工芸・地場産業部会

地場産業の掘り起こし、展示会・研修会の開催

5、特別部会

町づくり相談所の開設



写真-10 みのじの館(西枇杷島まちづくり拠点)

●ほかに自治会組織として図-5のような町内会組織がある。

尾張にしび祭りの山車の維持・管理等は町内会単位で行っている。

	町内区域	世帯数	人口数	山車保有
1	橋詰町	39	111	王義之車
2	問屋町	65	138	頼朝車
3	東六軒町	52	124	泰亨車
4	南六軒町	36	76	
5	西六軒町	52	144	紅塵車
6	松原東部	52	119	
7	松原西部	64	129	
8	杵東	39	95	
9	杵西	109	274	頼光車
	合計	508	1210	

表-1 町内会と世帯・人口数



図-3 西枇杷島町町内会図

4-2. 町の祭礼行事

1800年当時の名古屋を代表する三大祭りの御祭礼東照宮の山車祭りに影響を受け、西枇杷島でも青物市場で栄えた豊かな経済力を背景に従来からあった天王祭りに山車を加えたのが現在の尾張にしび祭りのはじまりである。名古屋型構造の山車は二層構造で、唐破風の屋根の下に大將や二体のからくり人形、一段下がった所に山車を導くざいふり人形一体が載せられている。祭りには約二百年前に製作された山車が四輛、約百三十年前に製作された山車が一輛の計五輛の山車が曳き出される。それぞれの山車には様々な嗜好を凝らしたからくり人形が踊り、勇壮で豪華な祭りとして今日までその伝統のわざを受け継いできた。山車は町の人々の後世に伝えようとする熱意と愛着に支えられ、昭和60年に西枇杷島の貴重な文化遺産として町指定文化財に指定されている。からくりの舞い、曲場の迫力、お囃子や掛け声など山車祭りは町衆の心を一つにする究極のコミュニティイベントと言える。



写真-11、12 尾張西枇杷島祭り

●王義之車（おうぎししゃ）／橋詰町町内会蔵 山車制作年：享和2年（1802年） 山車のサイズ：重量2.19t、高さ5.2m、幅2.33m、長さ6.3m からくり人形：王義之、大唐子、小唐子、前人形
●頼朝車（よりともしゃ）／問屋町町内会蔵 山車制作年：弘化4年（1847年） 山車のサイズ：重量2.19t、高さ6.0m、幅2.78m、長さ6.40m からくり人形：源頼朝、静御前、臣下、前人形
●泰亨車（たいこうしゃ）／東六軒町町内会蔵 山車制作年：文化2年（1805年） 山車のサイズ：重量2.56t、高さ6.1m、幅2.88m、長さ6.27m からくり人形：僧正坊、牛若丸、木ノ葉天狗、前人形
●紅塵車（こうじんしゃ）／西六軒町町内会蔵 山車制作年：享和2年（1802年） 山車のサイズ：重量2.87t、高さ6.0m、幅2.75m、長さ6.31m からくり人形：大將関羽、太鼓唐子、鳥舞唐子、前人形
●頼光車（らいこうしゃ）／杵西町町内会蔵 山車制作年：明治4年（1871年） 山車のサイズ：重量2.44t、高さ5.7m、幅2.88m、長さ6.09m からくり人形：大將源頼光、渡辺綱、坂田金時、熊、前人形

表-2 山車別仕様表

5. 東海豪雨と庄内川河川堤防改修および道路工事

5-1. 水との戦い、暮らしを守る生活

かつて西枇杷島は庄内川の堤防決壊による水害が度重なり甚大な被害を受けてきた。江戸期にはおよそ50回に及ぶ堤防決壊があり、特に甚だしかったのは寛永、元禄、宝暦、明和、安永、嘉永、安政の洪水等があげられる。とくに宝暦七年（1757年）の堤防決壊による被害は大きく、この宝暦洪水が直接の契機となって庄内川の上流部に洗堰を設けて流れを分流させ川下で庄内川と合流させるという新川開削（庄内川の分水計画）が実施された。現在の西枇杷島町の西側を流れている新川がその時の水害防止策でできた新しい河川である。新川は名古屋藩主・徳川宗睦が普請奉行として水野千之右衛門をその任にあたらせ、天明四年（1784年）に開削工事が始まり4年後の天明七年（1787年）に終了した。完成してからは被害が少なくなったものの十分ではなく、明治時代になっても庄内川堤防は決壊し、農作物の被害や住宅等の床下浸水等に見舞われていた。なお、庄内川氾濫による洪水は西枇杷島がある右岸に集中している。このことは洪水から名古屋城下を守るためであり、そのために当然のように左岸堤防を右岸より高く強固にした訳である。また、昭和34年9月26日の夜半に襲った伊勢湾台風では雨よりも風による被害が甚大であった。住宅、学校など多くの建物が倒壊したが、沿岸地域に比べてみると地理的に高潮等の被害は受けず浸水による被害は比較的軽いものだった。近年の水害では昭和36年の集中豪雨による被害が大きく、町全体が床下、床上浸水となったものの、その後、国や県の河川改修が進められた為か流域が被害を受けることは少なくなってきている。なお、近隣の輪中集落に見られる浸水被害から暮らしを守る石垣を高く積んだ水屋形式の建物はこの西枇杷島町にも見られ、このことも昔から水による被害が大きいものであったことを思わせる。



写真-13 水屋石垣



図-4 東海豪雨浸水実績図(2000年9月)



写真-14、15 町内各所の浸水状況(左図:県道名古屋祖父江線陸橋付近 右図:美濃路街道北二ツ杵神明社付近)

5-2. 東海豪雨の概要

平成12年9月11日夕方から12日未明にかけて愛知県を中心とする東海地方に記録的な大雨が降った。これは南の海上より北上してきた台風14号の暖かく湿った気流の流れ込みにより、日本付近に停滞していた秋雨前線が刺激され活動が活発になって発生したものである。名古屋地方気象台によると、日最大1時間降水量97.0ミリ、最大日降水量428.0ミリ最大24時間降水量534.5ミリは同気象台統計開始以来最も多い値である。(名古屋地方気象台発行災害時報告書号外より抜粋) この豪雨による県内の河川破堤は45ヶ所にのぼり浸水家屋は約68,000棟を超え、昭和34年の伊勢湾台風、昭和36年の集中豪雨に次ぐ近年稀に見る浸水害となった。

名古屋市に隣接し町の東西を庄内川と新川に挟まれている西枇杷島町は、この東海豪雨により町の西側を流れる一級河川新川の堤防決壊で過去最大規模の浸水被害を受けた。一方、東側の庄内川も夜の8時20分に警戒水位の5.70m(枇杷島観測地点の水位)を超え翌日の2時20分には計画高水位の9.18m、同4時30分には過去の最高水位を2m近く上回るT.P.9.46mを記録したが破堤までいかず、寸前のところで被害を免れた。

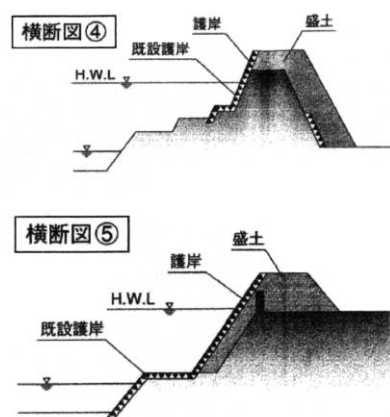


図-5 築堤護岸横断面図



図-6 庄内川築堤護岸工事位置図

5-3. 庄内川河川堤防改修工事の概要

庄内川激甚災害対策特別緊急事業の工事内容の主なものとして、①堤防強化と築堤（現在の堤防より平均約1m程度の嵩上げ）②河道内の掘削 ③新川洗堰の嵩上げ ④橋梁の架け替え等があげられる。中でも枇杷島橋詰め界限は庄内川特定構造物改築事業により以下のような工事が予定されている。

事業期間：平成14年度～平成26年度（予定）

事業内容：

○JR新幹線庄内川橋梁の架け替え

→現橋梁の東隣側に移設架け替えを計画しているため、問屋町内で該当する町家家屋の移転は避けられない。

○JR東海道本線枇杷島橋梁の架け替え

→旧新幹線橋梁跡に新たに在来線橋梁を作り移転する。移転後、現橋梁位置や現線路敷地の利用計画は未定

○県道名古屋・祖父江線枇杷島橋梁の架け替え

→新たに仮橋を隣接建設し工事期間中供用させた後、現在の橋梁位置に新設する。

○右岸13.8Kから 名鉄本線庄内川橋梁間の築堤護岸（前ページ 図-5、6参照）

→堤防嵩上げに伴い、現在の町家家屋への影響が大となり家屋移転は避けられない。

河川激甚災害対策特別緊急事業による護岸整備とともに堤防の嵩上げ工事や接続道路や鉄道橋の架け替えが現実のものとなってきた昨今、関係機関より具体的な将来像や実施計画案も示されることなく橋詰町・問屋町の町家家屋立退き移転交渉が進められている。とくに橋詰町では岩倉街道沿いの堤防側町家の立退き取壊しがすでに始まっている。

5-4. 県道名古屋祖父江線道路工事の概要

堤防が嵩上げされることになれば、枇杷島橋も鉄橋も架け替えとなり取付け道路もその変更工事を余儀無くされる。地域住民が把握している県道の実施計画は枇杷島橋より名鉄跨線橋も含めて北側への道路を4車線への拡幅する工事とのこと。しかし、正確な実施計画での説明ではなさそうである。4者協議会（国、愛知県、名古屋市、西枇杷島町）で道路についての話し合いがもたれ4車線案で計画決定、その変更作業と測量に入るとのこと。枇杷島橋より北側は県の仕事で県も測量に入る意志を固めたとのことである。しかし、現実には、堤防道路をどのようにするか？どの位置に配置するか？現状のままか？町中を通すか？交差点はどうなるのか？交差点の形状を？など様々な懸案が予想される。にしば町家地区まちづくり協議会では、住民から「みのじに車を通すことは考えられない」「大型が町に入ることは、町内本通りとしては考えていないし、好ましくない、歩行者の町でありたい」「みのじ街道は山車が通る」「電柱をはずしたいくらい、街路樹なども植えたいくらいである」など、また「一方通行は商売に困る。みのじは今のままでいいのでは」「堤防際交差点を立体交差にすると、みのじ旧道は車が減るのでは」「堤防道路は活かした方がみのじのバイパス的に使用できるので好ましいのでは」など、堤防嵩上げ、道路付け替え、県道名古屋祖父江線と旧道交差点との関係などについて多くの発言があり、正確な情報がないため不明なままである。

6. 歴史的町並景観に及ぼす影響と問題点

6-1. 町並景観の特長

西枇杷島的美濃路街道は東西約1キロに渡り、格子戸や格子窓或いは低い軒の平入屋根を持った町家が点在し、道の狭さとあわせて街道特有の風景を残している。かつて街道に面する間口の広さで課税額が決められた為、町家は間口が狭く奥に長い2階建ての建物が一般的である。内部空間には土間空間である通り庭が現存する家屋も多く見られ、座敷き配置も当時の面影を残して現在も茶の間、客間として使用している例は少なくない。また、隣接した町家家屋の間には「かんしょ」と呼ばれる表通りから裏に抜ける細い生活道路も見られる。そこに入ると表の喧噪が嘘のように消えまるで江戸時代に戻ったような感覚が体験できる。



写真-16 かんしょ

現在の町並には見られない人間的な暖かい曖昧な空間が「かんしょ」であり、両隣の住人が使用するばかりでなく、街道に面していない奥まった場所に住む住民にとっても便利な生活道路・コミュニティ通路として機能していた。また、東海地方によく見られる厄よけの屋根神様も通りに面した町家の屋根の上に見ることができる。屋根神様はかつて街道沿いに7社あったが、現在は2ヶ所と少なくなっている。商家家屋が密集していた為、火難よけや商売繁昌などを祈願した名古屋地方独特の習慣である。歴史という時間の経過は、様々な出来事をそこに刻みながら現在まで続き、風化しかけた古い石垣や瓦、板塀などを見ても当時の人々の日常生活が忍ばれ、独特の風情を醸し出している。商家が軒を列ねた景色が特徴とも言えるが、今日では当時の面影を忍ばせる店構えは見られない。代々続いている昔からの店舗でも今のニーズに応える店構えに大きく改造されている。特にファサードをパラペットなどで近代的なデザインに変えられていることが町家らしさを失わせている。



写真-17 屋根神様



写真-18 橋詰町堤防沿い町並み

6-2. 予測される影響と問題点

現在、国より示されている堤防道路の断面形状は法面が大きく北側に迫出し、問屋町的美濃路街道南側民地側の敷地や家屋に大きく影響を与えている。南問屋町の家屋全体の移転が計画されているとのこと。関係機関が個別に移転交渉を進めているも町の将来像に対する具体的な青写真は提示されておらず、関係住民は個々で戸惑っているのが現状である。協力するにも「どうなるか何も分からない」と言った状況だそうだ。「枇杷島橋がどうなるのか」また「県道名古屋祖父江線とはどのように接続するのか」管轄がまちまちな為まとまった具体性のあるプランが地域住民に示されていない。JRの鉄橋もその移転建設も運用しながら行う工事で、厳しい困難が予想されることは理解できるが、それら総合的な指針が示されていないため住民にとって「町がどのようなになるのか？」不安や疑念しか残らない。

調査して感じたことは、地域住民が安心して暮らせる地域の為のまちづくりとは反対方向に今回の堤防嵩上げや三橋架け替え橋梁工事、道路改修工事等が向いているように思える。多くの地域住民は国が行うこと県がやることを冷静に受け止め、現実には直面して困惑している。「体制に従うより他に手立てはない」かのようなあきらめに近い態度にも見える。十分住民の声を聞き町の将来像を共に考え、それらを実現させるための工事としての理解を得なければならないことは言うまでもない。

橋詰・問屋両町内会それぞれの住民移転世帯数が半数を超えている今回、これまでの様々な町内行事等の維持や管理を続けることは非常に困難になることである。住民の手で住民が望む地域の将来構想を専門家と共に考える、両者の考えを開示し話し合う開かれた検討形式が見られない点は残念である。それはそれぞれの関係機関別の現在の進め方に問題があり、関係機関より正式で具体的な改修案の提示が地元を示されないことが困惑の大きな要因となっている。改めて「にしばの住民が誇る歴史をいかに残すか」が今もっとも重要な案件と言えよう。町の原風景を後世に伝える重要な責任を自覚しその為の将来構想として今回の工事を位置付けるならば、歴史的な町の誇りを具体性のある形にして構想・計画案に盛り込むことが好ましい。

7. 景観デザインコントロールについて

1960年代後半からの行政主体まちづくりから、現在は住民主体のコミュニティ運動へと移行し定着してきている。そして多くの市町村で景観デザインの面から見たルールづくりがなされている。「まちづくり」のきっかけは特定目的の為の整備や事業実施等で始められる場合が多く見られるが、本来は総合的に進められなければならない。今回も庄内川堤防嵩上げ工事がきっかけでまちづくり議論が始まったが、まちの将来像も視野に入れて総合的に考え決定されなければならない。今回の事例は防災に強いまちを作ることがその目的にあり、特長ある西枇杷島らしい景観デザインの創造を抜きに「まちづくり」や「地域デザイン」を進めることは考えられない。地域住民の意向に沿ったまちづくりが望まれることは現在では当たり前のことである。景観デザインコントロールのキーワードを住民とともに考え、工事から受ける様々な影響や問題について十分議論し検討するよい機会である。

7-1. デザインコントロール手法

都市計画や地区計画などで町の将来像を定めその計画に沿って町をつくることはよく見られることである。まちづくりは行政や役所の仕事と考えている人が大半と思われるが、市街地開発事業や土地区画整理事業等の都市計画事業によりつくられる町の将来像についてすべて町づくりルールが定められているとは限らない。まちづくりのルールは住民や行政等関係者が相談しその合意に基づいて決めることができる。デザインコントロール手法は「まちづくりのルール」づくりとも言える。そのルールには、①法律や条例に基づき決定されるもの、②法的に担保されず関係者の合意に基づき決定されるものがある。建築基準法に基づいた「建築協定」、都市計画法に基づく「地区計画制度」、或いは自治体が定める「景観条例」や「まちづくり条例」等で地区指定の詳細なまちづくりルールを定めることが可能である。特に「建築協定」は建築の詳細な部分についてのルールを定めることが出来る。また「地区計画」は建築のみならず道路や公共施設等広範囲な部分にわたってルールを定めることができる強い規制力のある方法である。一方、法律や条例によらず自主的に建築物の形や色彩等をルール化して定める「まちづくり協定」などの自主協定の方法もある。自主協定は規制力はないが住民の話し合いの上で決定されることから民主的な方法とも言えよう。形や色彩あるいはデザイン等に関する詳細なルールづくりは出来ないが言葉や文章による「宣言」「憲章」等という方法でまとめている地域もある。今回の西枇杷島にしび町家地区まちづくり協議会では中間報告の「提言書」という形で話し合いの結果をまとめた。この地域も今後いろいろ検討し話し合いの上で合意形成できるもう少し強いデザインコントロールのルールを定めていくことが望ましい。

7-2. 住民の意識調査等より

西枇杷島町では第三次総合計画策定に当たりまちづくりに関する住民意識調査を2度行っている。最初は平成11年2月に町民1000人対し行われた。西枇杷島町のイメージに「安心して住めるまち」や「何となく雑然としている」などの次に「歴史や伝統を感じるまち」があげられていた。さらに表-4に見られる「西枇杷島を他の地域の人々に紹介するとしたら」の問いには半数以上の約56.5%の人が「歴史・史跡・伝統芸能（祭りなど）」をあげている。2番目は約38%で「バスや鉄道などの交通網の整備」があげられていた。

一方、2度目は東海豪雨後の調査であった。

『今後、まちづくりのために重点をおくことは？』の質問に浸水被害の影響からか解答の44.2%が「防災を重視した災害に強いまち」が選択された。しかし、『住み続けたいか？』の質問には

	件 数	%
1、自然環境と自然景観	63	12.0
2、歴史・史跡・伝統芸能（祭り等）	298	56.6
3、バスや鉄道などの交通網の整備	199	37.8
4、居住環境の良さ	137	26.0
5、就業機会の多様さ	11	2.1
6、文化・スポーツ・レクリエーション施設	29	5.5
7、特産品（商工業品や農産物）	13	2.5
8、イベントの盛んな町	49	9.3
9、西枇杷島町の生んだ偉人	10	1.9
10、人々の人情	52	9.9
11、これまでの様々なまちづくり	30	5.7
12、その他（具体的に： ）	24	4.6
13、わからない	136	25.8
無回答	13	2.5
合 計	527	100.0

表-3 町の魅力の紹介(町民アンケート)

「なるべく住み続けたい」「いつまでも住み続けたい」が併せて75.4%を占め、愛着を持って住み続ける希望を多くの住民が持っていることが読み取れる。

また、平成11年1月には中学生508名を対象に「新しい時代のまちづくりアンケート」を行ないその中で西枇杷島に関するイメージ調査を行っている。『どのようなイメージか?』に対し表-5のような結果が出た。「歴史や伝統を感じさせるまち」が40.9%を占め「安心して住める安全な町」が次に10.4%であった。

	件 数	%
1、緑や水などの自然の豊かなまち	20	3.9
2、歴史や伝統を感じさせるまち	208	40.9
3、自然と産業の両立したまち	15	3.0
4、産業が優先されたまち	17	3.3
5、住む人々の活気が感じられるまち	23	4.5
6、歴史や伝統と新鮮さがいっしょにあるまち	32	6.3
7、安心して住める安全なまち	54	10.6
8、なんとなくまとまりのないまち	42	8.3
9、住む人々の活気を感じないまち	39	7.7
10、その他（具体的に： ）	33	6.5
無回答	25	4.9
合 計	508	100.0

表-4 西枇杷島のイメージアンケート(中学生アンケート)

上記のようなアンケート等で『歴史や伝統を感じさせるまち』が選ばれたことは旧美濃路などが本町の資産であり存在そのものが誇りであると考えていることがうかがえる。

デザインコントロールの為のキーワードを『歴史や伝統を感じさせるまち』等にする、その上で住民の声が十分反映できる制度や協定を策定することが町の将来像を決定する大切なプロセスといえよう。

8. 河川改修後の具体的試案について

8-1. 意見交換と情報収集

地域住民の声を集める情報収集活動は前述の住民意識調査やアンケート結果の他に、以前からのつながりによる住民との直接対話や聞き取りより始めた。まず平成11年よりおこなってきたシャッター絵制作作業や展覧会開催等、あるいは当該地域を研究対象として行ってきた調査等を通し、住民の当地域に対する様々な思いを確認した。また、多くに人々に出会うため様々なコミュニティ活動にも参加し多くの情報収集を行った。そして出会ったほとんどの人々は生まれ育ったこの地域に誇りと愛着を持ち続けていることを改めて確認した。地域住民は今回の堤防嵩上げ問題が発生してから自主参加形式の「にしび町家地区まちづくり協議会」を平成14年に立ち上げ、その好ましい整備のあり方を研究検討してきた。住民の意見等をできるだけ発信し、地域の意見として工事に反映させようとする考えである。多くの住民の方々の輪の中に自身も参加し住民の様々な声を聞くにつけ、今、何が大切で何をしなければならないかを考えさせられた。

8-2. 具体的試案の提示

本年度4月の第12回町家地区まちづくり協議会において、今まで調査してきたことや参加してきた体験あるいは確認した住民の様々な意見や考えなどを聞き、また町の歴史や慣習、将来の姿などを自分なりにまとめ、アイディアの一つとして試案を作成提示した。

まず、前段で我国の近代都市基盤等整備手法に従来とは異なった価値観による判断が見え始めてきたことをあげた。例示として高速道路の橋脚耐用年数経過による建替え問題が出始めてきた

現在の東京日本橋の景観問題を取り上げ、従来手法の未来都市的な都市風景を生み出す建替え方式ではなく、本来の川の上に空が見えるに昔からの自然な風景に戻そうとする高速道路地下道化運動である。そして枇杷島橋詰・問屋地区の今回の堤防嵩上げ工事等では、町への影響を最小限にし日本橋と同様の視点で未来に手渡す「新しい創造の選択」の重要性を提案した。「最優先課題を確認し、それらを実現させる為の本来の整備のあり方を考える」ということである。

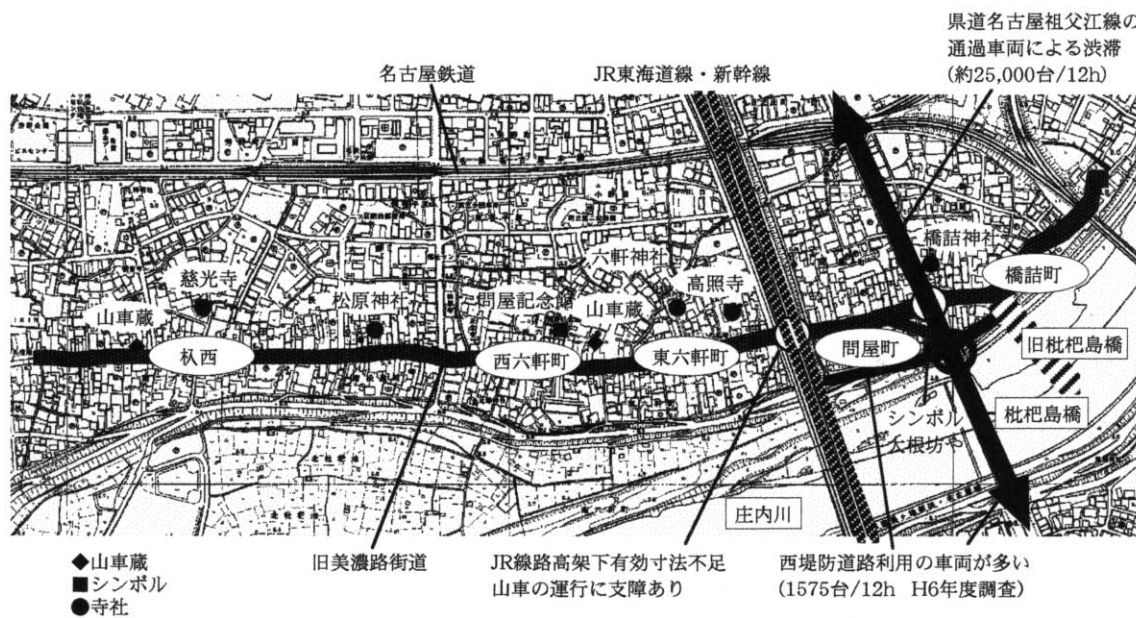


図-7 西枇杷島美濃路現況図

現在は県道整備による利便性と引き換えに、通過交通の増大と朝夕の渋滞、排ガス、交通安全問題等多くの懸案事項を引き受けてきた。街道として連続していた伝統的町並景観も県道により東西に大きく分断され、初夏の最大行事である尾張にしび祭りがその影響をもっとも大きく受けた。かつて町には生活の節目となる年中行事があり、感謝をする場であったり願う日でもあったり娯楽や休息の場でもあった。そのような行事を通して地域の人々の日常生活が地域や仲間意識を構築しながら町を一つにしてきた。地縁による町並形成の典型であった。しかし、最近では産業構造の変化や生活様式の多様化等で年中行事そのものも消えていったり簡素化してきたが、今日まで受け継がれてきた尾張にしび祭りは地域コミュニティ構築の最も好ましい手法の一つとして残っている。改めて、祭りが歴史性がこの町の財産であることを確認すべきであり、「歴史の延長上に町の再生や創造がある」と考えることができる。確認すべき最優先課題は「歴史的遺産の継承」「地縁によるまちづくり」を基本に据えることであり、にしび町家地区まちづくり協議会の提言でもそのことが確認されている。町が行った

平成2年度	20,594台/12h
平成6年度	26,978台/12h
平成9年度	23,894台/12h
平成11年度	24,257台/12h

出典：全国道路交通情勢調査

表-5 県道名古屋祖父江線の交通量調査

住民アンケートからも「西枇杷島らしさ」のトップにあげられている。上記のような考えから、西枇杷島美濃路街道橋詰・問屋地区は「歴史ある美濃路町並みの生活・風景の保全と再生と創造」を最優先課題と位置付け整備方針を確認し以下の方針に基づいたデザイン提案を作成した。



写真-19 にしび町家地区まちづくり協議会での発表風景

- 1、堤防の嵩上げは住民生活の安全面から必要なものとして受忍
- 2、JR鉄橋の移設の受忍と美濃路交差部における山車移動可能な高さ寸法の確保
- 3、堤防道路等の新しい道路配置を図り、歴史のある美濃路優先の道路配置を計画
- 4、地域車両は堤防道路で右左折し町内へ導入
- 5、西行き堤防道路のJR高架下通行を隣接民地側移転部分等利用で対応
- 6、通過車両の分離と祭り山車運行の両面を解決するために枇杷島橋の二層化を実現
- 7、枇杷島橋と橋詰神社前街道間はシンボリックな高架下空間として利用
- 8、町家住宅等の最小限の移転

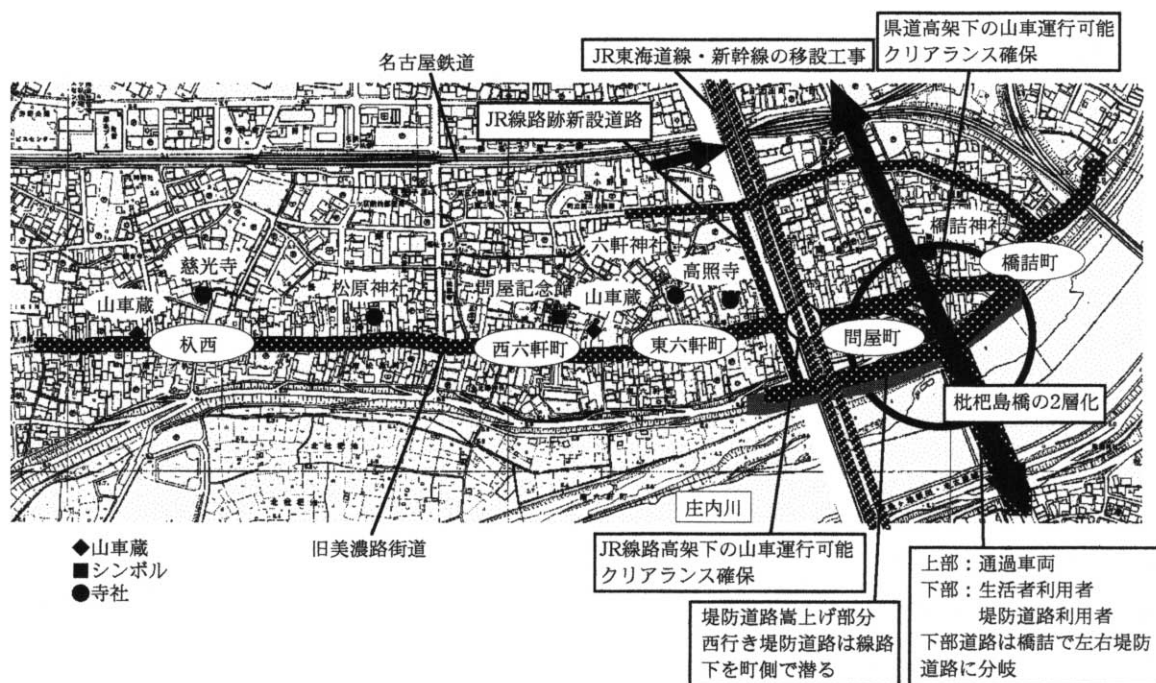


図-8 西枇杷島美濃路街道構想図

西枇杷島町の第3次総合計画の冒頭、まちの将来像についても・・・「自然と人とまち」が共生・共生する町・・・潤いある生活環境と特色ある歴史や伝統を大切にし豊かな自然と産業が共生した「快適都市西枇杷島町」をめざす・・・とある。従って、西枇杷島町の中でも特に際立った特徴を見せている美濃路街道沿いの町並みは期待される町の典型として、積極的に「歴史ある美濃路町並の生活・風景の保全と再生と創造」を推進すべきであろう。



写真-20 にしび橋詰・問屋町構想模型
手前側が橋詰・問屋町界隈で、県道名古屋祖父江線の高架化、枇杷島橋の2層化の様子を見ることができる。

9. おわりに

今回の提案は、今後の住民参加型まちづくりのきっかけとなる話題提供でもある。この成果を様々な住民集会や関係機関等で発表することでそのスタートをきる予定である。また、住民の声が反映するまちづくりが最も基本的で肝要なことと考えるため、今回制作した模型等を利用して様々なワークショップを行い、地域住民の意思を確認しながら将来の西枇杷島町美濃路の望ましいあり方を共に検討し、反映させた提言を行っていきたいと考えている。

「まちづくり」には多くの時間と努力が必要と聞いている。今後いっそう地域住民や関係者との対話を重ね、継続努力することを改めて確認するものです。

東海豪雨罹災をバネとし、歴史的町並西枇杷島美濃路の望ましい再生を目指して。

10. 謝辞

本研究は、「日比科学技術振興財団」の研究助成をいただいていたもので、振興財団の関係各位に深く感謝申し上げる次第です。また、聞き取り調査や情報提供等に多くの地元の方々や関係の方々に御協力を頂きましたことも併せてお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 西枇杷島町編 西枇杷島町史
- (2) 西枇杷島町編 にしび 第3次総合計画[2001～2010]
- (3) 西枇杷島町教育委員会編 にしびの文化財 第8集 枇杷島市場
- (4) 西枇杷島町教育委員会編 にしびの文化財 第9集 庄内川と枇杷島橋・中島
- (5) 西枇杷島町編 東海豪雨災害記録
- (6) 愛知県郷土資料刊行会 日下英之著 美濃路 熱田宿から垂井まで
- (7) 日本建築学会編 建築設計資料集成(総合版)
- (8) 百周年記念事業実行委員会編 西枇杷島百年 歴史紀行
- (9) 愛知県総務部編 いきいき地域